

文教大学文学部日本語日本文学科所蔵

『花咲爺絵巻』について

日 沖 敦 子

はじめに

日本五大昔話の一つとされる「花咲爺」は、正直爺が福を授かり、欲張り爺がまねして失敗するという、いわゆる隣の爺型の構成で、犬の霊力を核とした話である。「花咲爺」の研究は、大きく二つの方向から深められてきた。一つは、「花咲爺」の起源について考察するもの、そしてもう一つは、江戸時代の出版物と口承文芸の関係について論ずるものである。話の起源については未詳だが、江戸時代初期の赤小本『めいよの翁（かれきに花さくぢ、ひおきな）』を嚆矢とし、赤本に『枯木花さかせ親仁』（東洋文庫内岩崎文庫蔵）など数種の存在が知られている¹。口承文芸として伝来する「花咲爺」譚の報告は数多くあるが、江戸時代の出版物の影響を強く受け、て成立したとの見方がなされている。

「花咲爺」とよく似た話として、灰で飛ぶ雁を落とすという結末の「雁取爺」がある。柳田國男氏は、「花咲

爺」の古い型を「雁取爺」とした²。「花咲爺」の伝承地域が日本列島の中央部に点在するのに対し、「雁取爺」は、「花咲爺」の地域を取り囲むように列島の北部と南部に偏って伝承されていることから、「雁取爺」を土台として「花咲爺」が成立したのではないかという指摘もなされている。さらに、同種の昔話が中国や朝鮮にも存在することから、こうした昔話との比較を通して、民族的、社会的な背景が昔話の成立に与えた影響や、話の伝播関係についても考察が深められている³。

さて本稿では、文教大学文学部日本語日本文学科が所蔵する『花咲爺絵巻』（以下、文教本）を紹介する。従来、絵巻の形態で伝来する「花咲爺」は、早稲田大学図書館が所蔵する『花咲爺絵巻』（以下、早稲田本）が知られるのみであった。早稲田本は、挿絵の彩色の指示書などがあり、いわゆる粉本で詞書はない。文教本は、早稲田本と極めて類似性が高い絵巻である⁴。

従来の「花咲爺」の研究では、草双紙などの出版物が注目されてきたが、絵巻については、草双紙より一段高い受容層が想定される。文教本は、絵巻の形態で「花咲爺」が受容された意味やその背景について改めて考える手がかりとなる。一部破損はあるものの、詞書も備えた文教本は、「花咲爺」の受容を考える上で極めて貴重な絵巻である。また、文教本を収める箱には墨書があり、本絵巻の来歴についての記述もある。

以上のような関心のもと、本稿ではまず、文教本の詞書の特徴について、江戸時代において様々に受容された「花咲爺」譚の諸伝本との比較を通して検討する。次に挿絵について、早稲田本と比較し、両絵巻の関連性について具体的に指摘する。そして、箱に記された伝来経緯から、江戸時代後期における「花咲爺」の受容について述べ、これらの考察から、文教本の特徴について明らかにしたい。

一 「花咲爺」譚の伝本

まず、本絵巻の書誌について、簡潔にまとめると次の通りである。

(成立) 江戸時代中期(十八世紀)
(形態) 卷子装、一巻

(外題) 題簽「守景粉本昔話の絵」(画像1)



(画像1)

(内題) なし(冒頭部欠のため、未詳)

(寸法) 二八・四cm×一〇・八三cm

(挿絵) 十五図(淡彩)

(備考) 『思文閣出版古書資料目録』第二四四号(二〇

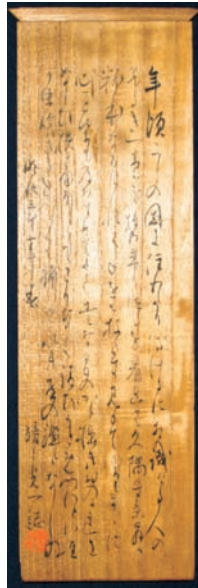
一五年十月)に「花咲爺 一巻」として掲載されているものと同一。一部破損、全面に裏打ちがなされ、補修されている。現在、同様の絵巻は、早稲田大学図書館が所蔵しているが、本絵巻より挿絵が二図少なく、詞書がない。また、本絵巻には淡い彩色がなされている。本絵巻の挿絵は早稲田本の挿絵と概ね一致するが、人物の向きや描写など、異なる箇所も見られる。

(箱表書) 花咲爺 絵巻(画像2)



(画像2)

(箱蓋裏) 年頃こしの国に住わたり侍けるに、相識ける人の「ふるき一巻を携来りつるを看出は、久隈守景翁か」粉本なりければ、手をも持たず、見もてゆくまゝに「心こと葉も及はず、めてたく尽なるものから拙きおのかれに」ならひ模さまはしうて、わりなく請ひもとめつ。いといたう虫喰たるを、からくも補ふ也。永き道の鑑となしぬ」明治三十一年春 靖々光一誌(陽刻印「緑堂間叟」)(画像3)



(画像3)

(箱側面) 第七拾七番「福」百時話
花咲翁巻「守景筆(紙添付)」
(画像4)



(画像4)

「花咲翁」譚の伝本については、内ヶ崎有里子氏により諸本研究がなされている。内ヶ崎氏も述べられているように、どのような要素を満たした作品を「花咲翁」譚と定義するかについては諸説あるが、ここでは、『日本昔話大成』十一巻所収「昔話の型」の「花咲翁」を基準とし、氏の研究を参考に、江戸期昔話絵本「花咲翁」の諸本を列挙しておこう。

●赤本・黒本・青本

①『枯木花さかせ親仁』(五丁、画作者・刊年未詳、東洋文庫内岩崎文庫蔵)

②『花咲翁』(五丁、画作者・刊年未詳、東洋文庫内岩崎文庫蔵)

③『花さきぢゝい』(五丁、画作者・刊年未詳、大東急記念文庫蔵)

④『花さきぢゝ老楽のゑいぐわ』(前半欠、奥村政信画刊年未詳、国会図書館蔵)

⑤『花咲ぢゝい』(前半欠、画作者・刊年未詳、大東急記念文庫蔵)

●黄表紙

⑥『御馴染花咲祖父』(十五丁、歌川豊国画、市場通笑作、寛政六年刊、都立中央図書館蔵)

⑦『古昔花咲勢親父』(五丁、画作者未詳、寛政九年刊)

カ、都立中央図書館蔵)

- ⑧ 『昔噓枯木花』(十五丁、歌川豊国画、市場通笑作、享和元年刊、岩瀬文庫蔵)

●合巻

- ⑨ 『赤本再興 花咲ち、』(十五丁、歌川国丸画、式亭三馬補綴、文化九年刊、国会図書館蔵)

- ⑩ (赤本再興 花咲ち、) (十五丁、歌川国丸画、式亭三馬補綴、文化九年刊、国会図書館蔵)

- ⑪ 『勸善花咲爺』(十丁、歌川国貞画、十返舎一九作、文政三年刊、慶應義塾大学図書館蔵)

- ⑫ 『花咲爺誉魁』(十丁、歌川国芳画、楽亭西馬作、天保期頃刊カ、国会図書館蔵)

●豆本(小本)

- ⑬ 『花咲噺し』(八丁、南宋・遠浪斎重光画、刊年未詳、白百合女子大学図書館蔵)

- ⑭ 『花咲ち、』(八丁、画作者・刊年未詳、白百合女子大学図書館蔵)

- ⑮ 『昔咄花咲爺』(八丁、宇田千町作カ、天保・弘化期頃刊カ、白百合女子大学図書館蔵)

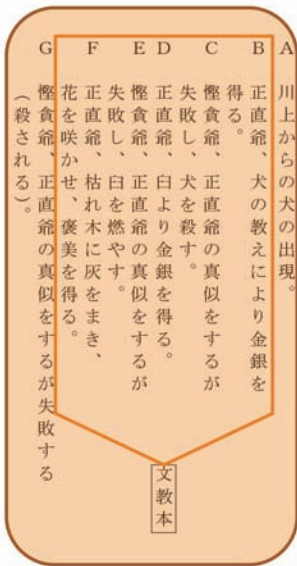
二 江戸期昔話絵本「花咲爺」の詞書と文教本の詞書

先に述べたように、文教本は最も近い関係にある早稲

田本には詞書がないため、右の江戸期昔話絵本「花咲爺」の諸本一覧には含まれていない。よって、文教本と早稲田本の関係についての考察は後述することにして、まずは、文教本と同時代の「花咲爺」の詞書との比較考察を試みよう。

江戸時代初期の赤本である『枯木花さかせ親仁』(①)の筋を踏まえ、内ヶ崎氏は、次の【図1】のAとGのように「花咲爺」の大筋を整理されている。これに従い、文教本の太筋を確認すると、文教本には犬の出現に関する記述(A)と、慳食爺の最後に関する記述(G)がない。犬の出現に関する記述(A)がない「花咲爺」の諸本は、先に挙げた⑥、⑧と⑮である。

【図1】 文教本の詞書



今日、一般的に知られている「花咲爺」では、正直爺が犬をかわいがって飼っている場面から話が始まっていることが多く、その犬がどのような経緯で正直爺に飼われることになったかは記されていない。しかし、赤本『枯木花さかせ親仁』には、次のようにある。

中むかしの事なるに、あるいなかに、正じきぢ、ば、と、けんどんぢ、ば、とすみけり。正じきば、川へせんたくに出けるが、折ふし川上よりちんころ一疋ながれくる。

この後、正直婆は不憫に思つて「ちんころ(子犬)」を拾つて連れ帰り、かわいがつて育てる。この「川上からの犬の出現」は、昔話に目を向けると、いくつかのパターンが見られ、赤本と共通する展開も確認できる。

昔話では、犬がどのような経緯で正直爺に飼われることになったかが語られている場合が多いのである。まず、「川上からの犬の出現」について、『日本昔話通観』で近代に民間で採集された昔話を確認してみよう¹⁾。

例えば、婆が川へ洗濯に行くとき赤と白の二つの小箱が流れてきて、その箱の一つから子犬が出てくるという展開(山形県米沢市、群馬県利根郡新治村、新潟県北蒲原郡安田町など)や、婆が洗濯をしていると桃が流れてきて、それを持ち帰ると桃が子犬になったという展開(富

山県富山市、岐阜県吉城郡河合村)、婆が洗濯をしていると子犬が婆の方へ流れてきたので拾つて帰るという展開(埼玉県秩父郡皆野町)など、婆が洗濯をする際に川上から流れてきたのを拾うというパターンがある。

赤と白の箱が流れてくるという話は、寛政四年(1792)に刊行された熊阪台州の『含陽紀事』にも見られる。『含陽紀事』は、子どものために昔話を漢文体で記したもので、最初に「花咲爺」(「紀」二翁事)の話がある。その筋書は、次の通りである。「一翁媪」がおり、翁は山で樵をし、媪は洗濯をして暮らしていた。媪が洗濯をしていたところ、「タチマチ絳白ノ二筐」が流れてくる。媪が「絳キハ彼ニ去レ、白キハ此ニ来レ」というと、白筐が媪の前に流れ着く。取つて開けてみると、中から「一狗子」が出てくる。媪はそれを連れ帰り、翁と育てる。また、「川上からの犬の出現」については、上の翁と下の翁が魚取りをしていたところ、上の翁の網に犬が引っ掛かった。上の翁がその犬を捨てたところ、下の翁がそれを拾つて帰り、育てることになるという展開(岩手県大船渡市)もある。婆ではなく、上の翁と下の翁の魚取りをきっかけに犬を飼うことになるという展開である。このほか、下の翁が上の翁に誘われて魚釣りに行くが、上の翁が釣った魚の半分を分けるといふ約束を果たさな

いたため、下の爺が磯辺に流れ寄ったささら竹を拾って帰ったところ、下の爺がその竹を割って火を焚こうとすると、中から犬が出てきたという展開もある（鹿児島県薩摩郡下甕村）。これらはいずれも「川上からの犬の出現」に始まり、今日知られる「花咲爺」と概ね同様の筋書になっている。

昔話では、「川上から」という場に限らない犬の出現パターンもある。例えば、爺が婆の織った布を売りに行く途中で、子どもたちが犬の子をいじめているのを見て、布と取り替える（新潟県東蒲原郡上川村）という展開や、爺が町に行く途中、橋の下から子犬が呼ぶので連れ帰る（新潟県糸魚川市）という展開、良い翁が市日で餅を買って帰る途中で犬を拾う（秋田県北秋田郡上小阿仁村）という展開、爺婆が上参り（本願寺参り）をして子犬を買い、かわいがる（石川県江沼郡山中町）という展開、竜宮での土産に犬をもらう（香川県三豊郡詫間町）など、『浦島太郎』や他の話との関連性を思わせる展開もある。参詣の途中で犬を拾うという展開は、例えば、寛政六年（一七九四）刊行の『新玉はな咲物がたり』（恋川春町）とも共通しており、この話では、慈悲深い夫婦が千手観音を信じ、その参詣途中に子犬を拾うという展開になっている。

このように、「犬の出現」について記される例は、赤本をはじめとする江戸時代の絵本「花咲爺」にしばしば見られ、江戸時代後期以降の語りに通じていると思われる近代に採集された昔話にも共通する点が確認できる。しかし、文教本では、話の導入が次の通りであり、「犬の出現」については記されていない。

只或時、賤き民家^{にか}□年のころ六十路余りの夫婦あり。元より正直にして志もいとやさしく情心の深けれど、子どもとてはなく、貧きいとなみして暮しけるか、農業のいとまに年頃一疋の白犬を畜養^{ひてか}□□、夫婦共深くいつくしみ朝夕の喰物も我か子の如く養ひ居けるが：

あくまでも、子どもがいなかった老夫婦が「一疋の白犬」を我が子のように大切に飼育していたとあるのみである。昔話にも、「犬の出現」の詳細を語らず、子のない爺と婆が白い犬を子供のようにかわいがるといふ筋書は見られ（新潟県東蒲原郡上川村、富山県富山市、島根県仁多郡横田町^りなど）、文教本に共通する。

また文教本には、慳貪爺の最期に関する記述（G）がない。同様に（G）が見られない「花咲爺」の諸本は、先に挙げた①〜⑯の中にはなく、①〜⑯のいずれの諸本にも、何らかの慳貪爺の結末が記されている。

①②③では、慳貪爺は打擲を受け、殺される。④⑤⑥⑦⑧⑬では、慳貪爺は殺されない(打擲を受ける)。(このうち⑥⑧は、慳貪爺婆は夢で神に諭され改心する。⑨⑩では、慳貪爺は失敗した時点では殺されない(打擲を受ける)が、その後、慳貪婆が正直爺の家に盗みに入り、化物に脅され、雷によって殺される。⑪⑮では、慳貪爺は殺されない(打擲・棒縛り)が、その後、改心して、正直爺に詫び、正直爺は慳貪爺に金銀を分け与え、教訓する。⑫では、慳貪爺、正直爺の真似をするが失敗し、斬られて死ぬ。⑭では、慳貪爺、正直爺の真似をするが失敗し、慳貪爺は戒めを受け、連行される。このように、慳貪爺婆が「改心」するという道徳的な結末も見られるが、多くは、「隣の爺」型の話に共通する、勧善懲悪の結末が用意されている。

以上、確認したように、文教本の大筋と全て共通する絵本「花咲爺」の諸本は、①⑤には確認できない。「花咲爺」の話は、勧善懲悪を示した教訓話であるところに特徴があり、正直爺と慳貪爺の対比的な描写と慳貪爺の結末は外すことのできない要素である。そのことは、昔話についても同様で、慳貪爺に対する懲罰の内容については多様であるものの、『日本昔話通観』に挙げられている「花咲爺」型の昔話のほとんどに記されている。

しかし稀に、慳貪爺のその後についてふれず、正直爺が花を咲かせて褒美を得るという結末のみを記した、文教本と同様の結びとなっている話もある。例えば、犬を殺して木の下に埋めてしまうという展開までは、慳貪爺が登場するが、その後、正直爺はその木を燃やして灰を持ち帰り、木に登って撒くと花が咲き、大判小判がなったという話(栃木県芳賀郡茂木町)がある。また、「花咲爺」の話としては異色だが、殿様の山で木を切っていた爺が通りかかった殿様に「花をひとつ降らせてくれ」といわれ、爺がどうらん(たばこ入れ)のたばこを振るとそれが皆きれいな花となり、殿様から褒美をたくさんもらったという話(広島県比婆郡高屋町)もある。この話に慳貪爺は登場しない。

多様な「花咲爺」の話の中で、文教本は、その末尾の詞書にあるように「むかし乳母が懐にて寝耳に聞伝へし」話を基に描かれた絵巻である。本稿で例に挙げた、赤本をはじめとする江戸時代の「花咲爺」の文献と物語の展開が必ずしも一致するわけではない。しかし、文教本は、著者が耳にした語りを基に「孫子へのかたみかてらに」との思いから制作された絵巻であり、「花咲爺」の受容の在り方を考える上で大変興味深い作例であると言える。

三 文教本と早稲田本の挿絵比較

現在確認できる『花咲翁絵巻』の伝本は、本稿で紹介する、文教本と、早稲田本の二本である。両本の書誌について簡潔にまとめると次の通りである。

・文教本：一巻。二八・四×一〇八三cm。『国書総目録』

に記載なし。十五図。詞書あり。

・早稲田本：一巻。二二・一×六六七・二cm。『国書総

目録』に「花咲翁絵巻」とあり。十三図（文

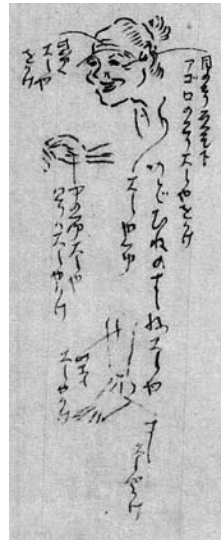
教本の第一図、第二図を欠く）。詞書なし。

早稲田大学図書館データベースの書名には「粉本」とある。本来、「粉本」は、画家の創意工夫が凝らされた下絵を指すものだったが、今日、「粉本」は「模本」ないしは「手本」のことと理解されるのが一般的である。

一口に「粉本」といっても、下書き・画稿類を指す場合と、模本、手本類を指す場合とは、その意味するところが全く相反する¹⁰。早稲田本は、いわゆる「模本」であると推察され、画家の創意工夫の痕跡がそこに表された画稿というよりも、古画の模写と考えられる。所々に人物の面貌や装束の抜書、指示書があり、巻末部には、爺の面貌、手足の抜写も見られ、彩色に関する細かな指

示書も見られる（画像5）。

（画像5）



文教本は淡彩の絵巻であるが、この早稲田本と比較すると、全体的な構図は、ほぼ一致している。文教本の挿絵場面を整理すると、次の1〜15のようになる。また、この場面番号をもとに作成した挿絵対照表は【図2】の通りである。

- 1 六十路余りの正直者で心優しい夫婦は、貧しいながらも一匹の白犬をかわいがり育てている場面。
- 2 正直爺、犬の導きにより小金の入った壺を掘り出す場面。
- 3 慳貪爺、小金の壺の話聞き、羨ましく思い、犬を借りてあやかりたいと思う場面。
- 4 慳貪爺、古き椀、わらじの類、犬猫の白骨などを掘り出す場面。

- 5 慥貪爺、犬を見つけ出して打ち殺す場面。
- 6 正直爺、慥貪爺の話に驚き悲しみ、犬が埋められた所に小松を植える場面。
- 7 正直爺、柚人に頼んで大木となった松の木を切り倒す場面。
- 8 切り倒した松の木で臼を作る場面。
- 9 正直爺が臼で米や麦などを舂くと、倍増し、その中から小金が出てくる場面。
- 10 慥貪爺が臼を借りて米や麦を舂くが、中身は半減し、宝も出てこない場面。
- 11 慥貪爺は腹を立て、臼を打ち砕いて捨ててしまう場面。
- 12 正直爺は、慥貪爺が臼を打ち砕いて捨てたことを知り、また隣へ行き、臼の欠片を拾い集めて持ち帰り、庭の木陰で焼く場面。
- 13 正直爺が木陰でできた灰を集め、桜や桃などの枯木に振りかけると花が咲き実を結んだ場面。
- 14 正直爺の業が、領主の耳に入り、領主らの前で枯木に灰を打ちかけると、忽ち花が咲き、実を結んだ場面。
- 15 正直爺は、領主からたくさんの金子を受け取り、栄えたという場面。

文教本の第一図および第二図は、早稲田本には見られない挿絵であるが、他の場面は共通し、全体的な構図はほぼ一致している。

それでは早稲田本に見られる指示書は、文教本の挿絵の表現と合致しているのだろうか。確認すると、早稲田本のはとんどの指示書は彩色に関するもので、主に色名が書かれている。結論から言えば、文教本の彩色は早稲田本に見られる指示書と合致している。

例えば、早稲田本第七図で、鶏の「口バシ（嘴）キ（黄）」と指示書があるように、文教本で鶏の嘴は黄で彩色されている（画像6）。

（画像6）早稲田本第七図

文教本第九図（部分）



【図2】文教本・早稲田本の挿絵対校表

	早稲田本	文教本	
特になし。	×	○	1
特になし。	×	○	2
正直爺の手前の壺、婆の位置に若干の違いあり。室内の障子の有無(早稲田本に障子あり)。室内奥の器の形状、種類、位置に違いあり。	○	○	3
掘り出された椀や下駄の向きに違いあり。欄間周辺の草の描き方に違いあり。	○	○	4
極貧爺の左足の出方が大きいかな否かに違いあり。	○	○	5
背後の木の太さに違いあり。正直爺の頬の置き方(角度)に違いあり。細の位置に違いあり。	○	○	6
向って左の杻人の腰巾着の位置が腰にあるか、腰から離れた位置に置かれているかの違いあり(文教本は腰にあり)。	○	○	7
正直爺の羽織柄の有無(早稲田本は柄あり)。臼を作る杻人の手に握られている小道具の違い(文教本は木槌と鑿、早稲田本は手杵)	○	○	8
婆の足下の木桶の有無(文教本には木桶あり)。正直爺が握る杵の角度、ござの上の箕が置かれている角度に違いあり。鶏の後ろにある籠とつめかけの俵の位置が左右逆。ひよこの有無(早稲田本にはひよこ有)。向かって左に描かれている極貧爺の背を向ける身体の角度に違いあり。	○	○	9
極貧爺夫婦の背後の室内に描かれている俵や唐菓の有無(早稲田本には俵や唐菓あり)。	○	○	10
極貧爺の足下の杵の有無(文教本には杵あり)。	○	○	11
正直爺の手に握られているものに違いあり(文教本は右手に火箸、左手に松の枝。早稲田本は右手に火吹竹、左手に火箸)。正直爺の腰巾着の有無(早稲田本にあり)。正直爺の脇にある籠の位置。	○	○	12
奥の桜の木(建物の手前の木)の幹の曲がり方に違いあり。	○	○	13
領主の前にいる従者の顔の向きに違いあり。また、その従者の袴の模様の有無に違いあり(早稲田本には模様あり)。領主の鬚髯の有無(早稲田本には鬚髯あり)。正直爺の羽織柄の有無(早稲田本は柄あり)。	○	○	14
8・14では正直爺の羽織柄はなかったが、15では早稲田本と同柄が入っている。領主の鬚髯の有無(早稲田本には鬚髯あり)。	○	○	15

(※番号は、右の場面番号および翻刻に示した場面番号に対応する)

また、早稲田本第十二図で、領主のそばに控えている人物たちの服装にも「黒」「キ（黄）」「大しや（代赭）」などの指示書があるが、文教本でも同様の彩色がなされている（画像7）。

（画像7）早稲田本第十二図 文教本第十四図（部分）



さらに、早稲田本第十二図の後の巻末部には、先に挙げたように、正直爺の顔や手の彩色について、部位ごとに「大しや」を混ぜるなどの指示がなされており、文教本では赤褐色を混ぜたような色で彩色されているのが確認できる（画像5）。

文教本と早稲田本が大変近い関係にあることは、現段

階で文教本と早稲田本の二本しか『花咲爺絵巻』が確認されておらず、当時数多く制作され、同様の絵巻が広まっていたとは考えにくいこと、そして、文教本と早稲田本の全体的な構図が近似していること、文教本の彩色が早稲田本の指示書にみられる色の指定と一致することからも明らかである。

しかし、【図2】に示したように細かな点では違いも見られる。人物や物の位置や向き、第三図では室内の棚に描かれた器の形状にも違いがある。両本を見比べると、文教本は早稲田本に比べ、全体的に簡略な傾向が認められる。

例えば、文教本では次のような点で早稲田本より簡略な表現となっている。

- ①室内に障子が描かれていない（第三図）。
- ②向かって左側の仙人の巾着のそばに煙管が描かれていない（第七図）。
- ③ひよこが描かれていない（第九図）。
- ④慥貪爺夫婦の背後の室内に俵や唐箕が描かれておらず、これらの複雑な絵を省き、淡墨でぼかしている（第十図）。
- ⑤建物の裏側の小木が描かれていない（第十三図）。
- ⑥従者の袴に模様がない（第十四図）。

⑦領主の顎鬚がない（第十四図）。

このような文教本の傾向の他に注意したいのが、小道具の違いである。②に挙げた第七図の左側の杣人の腰元に描かれている巾着のそばに煙管が描かれているか否か（文教本は杣人の腰元に巾着のみ、早稲田本は杣人の背後に巾着と煙管）という違いのほか（画像8）、第八図の臼を作る杣人の手に握られている小道具の違い（文教本は木槌と鑿、早稲田本は手斧）、第十二図の正直爺の

（画像8）早稲田本第五図

文教本第七図（部分）



手に握られているものの違い（文教本は右手に火箸、左手に松の枝。早稲田本は右手に火吹竹、左手に火箸）といった小道具の違いがある。第七図では小道具の有無、第八図や第十二図では小道具そのものが異なっている。第七図で描かれている巾着は、中に火打石が入っていることを想像させる。早稲田本に描かれている煙管は、杣人の仕事の合間の休憩の様子を思わせる挿絵である。文教本には見られない早稲田本の煙管の挿絵は、話の本筋には直接は関わらない別の場景を想起させる¹¹。また、第十二図は、文教本では、正直爺の手に松の枝が描かれているが、早稲田本では、火吹竹が描かれており、場面を説明するのによりふさわしいものとなっている。これらの点から、文教本より早稲田本の方が表現に説明的な傾向が認められよう¹²。

またこのほかに注目できる違いとして、正直爺の羽織が挙げられる。早稲田本には指示書として「大しや」と記されており、文教本でも代赭を用いた赤褐色で彩色されている。しかし、早稲田本には柄が入った羽織が描かれているのに対し、文教本には柄がない。にもかかわらず、文教本第十五図に描かれた正直爺の羽織にのみ、早稲田本と同様の柄が描かれているのである。

文教本と早稲田本の制作については、①文教本を基に

早稲田本が制作された、②早稲田本を基に文教本が制作された、③文教本と早稲田本は祖本を同じくするものの、両本はそれぞれ別の絵巻を参照して制作された、④文教本か早稲田本のいずれかが祖本であり、その後、絵巻が模写されていく中で制作されたもう一方の伝本である、という四つの可能性が考えられる。

解釈に広がりを持たせる細かな挿絵など、説明的でわかりやすく整えられた傾向は、先行して存在する絵巻に絵師の趣向や工夫を加えた結果ではないだろうか。現時点で両本の成立の前後関係は明らかにし得ない。安易な推測は避けるべきであるが、他に類似した『花咲爺絵巻』の存在は確認されており、詞書を備え、挿絵に簡略な箇所がいくつか見られる文教本が祖本である可能性も考えられる。

四 文教本の受容と箱書が意味すること

先に述べたように、文教本は、従来知られてきた「花咲爺」には見られない詞書が確認できる。絵巻の冒頭が破損していることは大変残念だが、残された冒頭部からは、絵巻が制作された当時の「花咲爺」の受容をうかがい知ることができる。

例えば、「此花咲か祖父の□□□□、古へより初児の

寝物語にして、誰々も耳訓たる事なれと、何国いか成人と云ふ事も知らず」という一文に続いて「只、或時、賤き民家^に」年のころ六十路余りの夫婦あり、元より正直にして」と「花咲爺」の話を語り出す。『花咲爺絵巻』が制作された当時、既に「古へより初児の寝物語」として、「花咲爺」の話が受容されていたことが確認できよう。

江戸幕府旗本の森山孝盛（一七三八〜一八一五）は、随筆『蟹の焼藻の記』（一七九八年）の中で、幼い頃、母から寝物語などで「舌切り雀」や「猿と蟹」などとともに、「枯木に花さかせぢ」を聞いたと記している¹³。孝盛が幼い頃となれば、寛保・延享（一七四一〜七）頃のことであったと推察でき、当時、赤本『枯木に花さかせぢ』の話が流布していたことがうかがえる。滝沢馬琴（一七六七〜一八四八）は『燕石雜志』の中で「昔より童蒙のすなる物語」として「猿蟹合戦」「桃太郎」「舌切り雀」に続き、「花咲爺」を含む七話を挙げて考察している。また、瑞鳥園斎守翁（一七九八〜一八六一）の『雛廼宇計木』にも「花咲爺」は見られるが、その自序には「乳母の膝の上から、彼桃太郎及舌切雀外、種々有振れたる草紙を手遊びに為せる事、世並の如し、かくして取付立をする頃より図に指して、書中の意味を、附の

者より申事、常々の習風なり」とある¹⁴。当時、これらの物語がどのように親しまれるものであったかがうかがえ、この様子は、制作動機を記した文教本の末尾の次の詞書にも通じている。

扱、此嘯の有よし□に画きて、女童子の伽□一興にもなすへしと、年頃親き友に志村何某の□とめに任せて、永き日の徒ら草に物せしとなれば、詞書なくてはいかにも解しかたからんと、むかし乳母が懐にて寝耳に聞伝へし□□□思ひ出て、筆に任せて書入れたれば、ひが事もおほかりなん、さも又興をそふるはしならめと、孫子へのかたみかてらに、いと、拙き筆を染て、見る人笑ひ草□□な□

先に述べたように、「花咲爺」の話は、江戸時代初期の赤小本にさかのぼり、諸先学により、「花咲爺」の形成時期は室町時代末期から江戸時代初期と推定されている。正直者と慳貪者の対比的な描写は、勧善懲悪を説く「女童子の伽」として格好の話材だっただろう。

さて、「乳母が懐にて寝耳に聞伝へ」てきた「花咲爺」は、どのような人物によって記され、描かれたのだろうか。この点については、書誌の項目でも述べたように、文教本の上箱蓋の裏にある、次の墨書について検討する必要がある。

年頃こしの国に住わたり侍けるに、相識ける人のふるき一卷を携来りつるを看出は、久隈守景翁か粉本なりければ、手をも持たす見もてゆくまゝに、心こと葉も及はず、めてたく尽なるものから拙きおのかれにならひ模さまほしうて、わりなく請ひもとめつ、いといたう虫喰たるをからくも補ふ也、永き道の鑑となしぬ、明治三十一年春 靖々光一誌（陽刻印「緑堂問叟」）

この箱書によれば、越後国に靖々光一が住んでいた頃、知人が古い一卷を持ってきたという。それを確認したところ、久隈守景の「粉本」であった。お金もなく、ただ見るばかりだったが、言葉にならないほど素晴らしいもので、自分自身これにならって模写したくて、ついに買い求めた。虫が喰ってとても傷んでいたので補修し、生涯にわたる手本にしたという。

この箱書を記した靖々光一とは、山本光一（一八四三？～一九〇五）のことである¹⁵。名は信敬。号は花明園、晴々、靖々、皓々、露聲、真如菴、木石閑人など。抱一の門人山本素堂の長子で道一の兄に当たる。雨華庵三世の鶯一門にして、父素堂や祖父野崎真一にも江戸琳派の手ほどきを受けた人物である。起立工商会社で多くの図案作成を手がけ、明治十四年（一八八一）時点で中心的

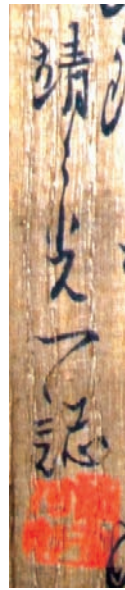
存在であったという。その頃、彼の漆器図案が、第一回内国勸業博覧会で花紋賞碑を受賞するなど、数多くの業績が知られている。しかし、明治二十四年に起立工商會社が閉鎖されると金沢へ居を移し、一時は、富山県立工芸学校（現高岡工芸高等学校）で教鞭をとるなど、若手作家の育成に力を注いだという。晩年の光一については、まだ研究が不足しており、未詳な点が多い。光一には、図案的なものもとより、屏風絵の大作も多数あり、人物画、草花図などの幅広い画題と多くの作例は、近年、特に注目されている。

文教本の箱書の筆跡は、光一の真筆に違いなく、板橋区立美術館の所蔵する彼の「狐狸図」（双幅）には、「緑堂間叟」の印とともに、「靖々光一」の署名が確認でき、それと同筆・同印と見て差し支えない（画像9・10）。文教本の箱書は、光一の足跡を知る数少ない資料として貴重である。



（画像9） 板橋区立美術館蔵「狐狸図」落款

（画像10） 文教本箱書



さて先述のように、この箱書によれば、知人からこの絵巻一巻を「久隅守景翁か粉本」として入手したという。それはおそらく晩年、光一が越後に住んでいた折だったはずである。文教本は虫損の多い絵巻であるが、当時、すでに「虫喰たる」ところが多かったようで、補修を行なったという。文教本には全面裏打ちがなされており、この補修はおそらく光一によるものと考えられる。光一がこの絵巻を入手したのは、「めてたく尽なるもの」であったからに他ならないが、習うに値する「久隅守景翁か粉本」を「永き道の鑑」として、手元に残しておきたかったからであるという。つまり箱書によれば、本絵巻は光一が言うところの「久隅守景翁か粉本」一巻ということになる。

久隅守景は、江戸時代初期に活躍した絵師として知られている。その生没年や出自については不明な点が多いが16、慶長年間（一五九六〜一六一五）に生まれ、元禄年間（一六八八〜一七〇四）末頃に亡くなったと推定さ

れている。狩野探幽に師事し、寛永年間（一六二四～一六四四）の末期までには、探幽門下の有力な弟子として活躍し、四天王の筆頭と目された人物であった。晩年は、加賀藩前田家の招きで金沢に滞在し、数々の代表作を生み出した。そのため、旧加賀藩領域を中心とした北陸地方には、代表作が多数残されている。近年、石川県立工業高等学校の所蔵する「加賀藩御用絵師梅田家絵画資料」に探幽や守景に関係するものが多く含まれていることが指摘され、守景と加賀の地との結びつきを示すものとして注目されている。

偶然の一致なのか、光一と守景は、二百年ほどの時を経て、晩年を北陸の地で過ごしたという共通点がある。それでは果たして、光一が「永き道の鑑」として入手したという文教本は「久隈守景か粉本」と考えられるのだろうか。

文教本は、霞など挿絵の上に詞書が書かれており、挿絵が描かれた後に詞書が書き加えられたことがわかる。また、第七図の手前の詞書（「翁は聞て打驚き」）、「焚木とせし」など、挿絵の間の余白に書かれた詞書が偏っていたり、詰まっているように感じられる箇所や、第十二図の手前の詞書（「又其灰をかき集めて」）、「愛情深きものゆへ」の詞書の後ろの箇所）など、挿絵と詞書の

間の余白が他に比べ広くなっている箇所がある。おそらく、挿絵全図が先に描かれ、その後、詞書が書かれたためと考えられる。

守景は多くの作品を残しているが、文教本の挿絵が、守景の真筆であるか否かを証明する資料はなく、あくまでも光一の箱書による伝として理解せざるを得ない。しかし、守景の代表的な作品として知られている『四季耕作図』や『耕作織蚕図』などの農村風景を描いた風俗画に見られる農耕具や鳥獣の類に目を向けると、文教本に描かれているものと描写が近似していることに気がつく。また全体的な画風も大変よく似ている¹⁷。

また、先に述べたように、文教本を「久隈守景翁か粉本」とする箱書を記した光一は、江戸琳派の手ほどきを受け、多くの図案作成を手がけた人物である。箱書の解釈はある程度の信憑性があると見ることもでき、文教本の挿絵が守景によって描かれた可能性は否定できない。守景が晩年の北陸滞在時に注文を受けて描いた可能性も考えられる。

ただ、文教本に見られる画風は、探幽や英一蝶、彼らに影響を受けた人物らの風俗画にも通じるものである。また、守景は江戸時代を通じて人気があり、吉田百太郎という贋作者がいたことも知られている¹⁸。現段階では、

文教本が守景によって描かれた絵巻であると判断することは難しい。文教本の挿絵が守景の手によるものか否かは慎重に検討する必要があるだろう。

また、文教本の詞書については、守景の筆跡が「守景筆」という識語に確認できる程度でしかなく、今のところ、比較対象となる作品や文書の類が確認できていないため、守景の自筆であるかを判断するのは難しい。ただし仮に、挿絵も詞書も同一人物によるものであるならば、先に述べたような余白に書かれた詞書の偏りや他の部分とはバランスが異なる余白の広さなどは生じにくいはずであるから、挿絵と詞書は、ひとまず別人の手によるものと考えた方がよいだろう。

おわりに

本稿では、文教本と江戸時代において様々な受容された「花咲翁」の諸伝本との比較を通して、文教本の特徴について述べ、またその箱書に記された伝来経緯から、江戸時代後期における文教本の受容について検討した。

文教本は、江戸時代中期（十八世紀）に制作されたと推定される「花咲翁」の絵巻で詞書を添えた唯一の伝本である。従来、『花咲翁絵巻』は、早稲田本が知られていたが、文教本は早稲田本にはない詞書を備えている。

さらに、文教本の第一図および第二図は、早稲田本には見られない挿絵である。

また、文教本の詞書を見ると、犬の出現に関する記述と、慳貪翁の最後に関する記述がない。犬の出現については、黄表紙、合巻、豆本（小本）にも共通する点があるものの、慳貪翁の最後の記述を欠く例は、他本には見られない。しかしながら、昔話には類例が確認できる。多様な「花咲翁」の話の中で、文教本は、その末尾の詞書にあるように「むかし乳母が懐にて寝耳に聞伝へし」話を基に描かれた絵巻である。赤本をはじめとする江戸時代の「花咲翁」の文献とは、物語の展開が必ずしも一致するわけではないが、著者が耳にした語りを基に「孫子へのかたみかてらに」との思いから制作されたものであり、「花咲翁」の受容の在り方として大変興味深い事例であると言える。さらに文教本の冒頭と末尾の詞書からは、当時、「花咲翁」が「初児の寝物語」として「誰とも耳馴たる」話として流布していたことが、改めて確認できる。

挿絵については、早稲田本の挿絵と全体的な構図の類似性が高く、早稲田本の色の指示書と違うことなく彩色がなされている。両本が極めて近い関係にあることは明らかである。但し、挿絵は細部において僅かながら違い

が見られる。その違いに注目すると、文教本の挿絵には簡略的な傾向、早稲田本の挿絵には説明的でわかりやすく整えられた傾向が認められる。現時点で両本の成立の前後関係は明らかにし得ないが、他に類似した『花咲翁絵巻』の存在は確認されており、詞書を備え、挿絵に簡略な箇所がいくつか見られる文教本が祖本である可能性も十分に考えられる。

文教本の箱書には、明治三十一年に山本光一によって記されたとの伝来経緯が書き記されている。それによれば、山本光一は、久隅守景によって描かれたと思われる、『花咲翁絵巻』の「粉本」一巻を求めたとある。この箱書は、探幽に師事した久隅守景の北陸滞在とその時期の絵画制作、山本光一の晩年の足跡を考える上で貴重な資料である。

絵巻の受容層は、草双紙とは異なる、一段高い階層が想定される。草双紙が町人階層をも含む不特定多数の受容者を対象として、大量に出版されたのに対し、絵巻は、上層階級の注文に応じて絵師が直接に腕を振るって制作に当たっている。文教本の挿絵については、守景が晩年の北陸滞在時に注文を受けて描いた可能性もある。しかし現段階では、資料が乏しく、守景によって描かれた絵巻であると判断することは難しい。確かに、挿絵は守景

風であるが、制作者については今後も検討を重ねていく必要がある。

興味深いことに、五大昔話の一つに数えられる「桃太郎」も、江戸時代中期以降、絵巻が制作され、現在十数本の所在が確認できる。絵師が明らかなるものを確認してみると、①ニューヨークパブリックライブラリー蔵本（狩野栄信筆）、②アイルランドチェスタービーターライブラリー蔵本（喜多武清筆）、③ジェノバ東洋美術館蔵本（樋口探月筆）、④東京国立博物館所蔵本（狩野雅信筆）、⑤公文教育研究会蔵本（高崇谷筆）、⑥高松市歴史資料館蔵本（高崇溪筆）、⑦国立歴史民俗博物館蔵本（狩野探玄筆）など、狩野派系の絵巻として受容された履歴がうかがえる¹⁹。「花咲翁」の絵巻化がなされ、粉本を基に絵巻が制作されていく時期と、一連の「桃太郎」の絵巻の制作時期は重なる。草双紙などの出版物とは別に、江戸時代中期以降に絵巻という形式で「花咲翁」が受容されたといった背景については、「花咲翁」のみならず、他の作例を交えて検討していく必要があるだろう。

文教本は、今日、日本五大昔話の一つとされる「花咲翁」の絵巻として、詞書を有する唯一の伝本である。また、その詞書にあるように「むかし乳母が懐にて寝耳に聞伝へし」話を基に制作された文教本は、まさに〈語り

の絵巻化」に他ならず、「花咲翁」の受容の在り方を考える上で極めて重要な伝本と認められるのである。

付記 本稿は、平成二十七年年度科学研究費補助金（若手研究B）による研究成果の一部である。掲載の御許可を賜った諸機関に厚く御礼申し上げます。

注

1 野村純一編『別冊国文学 昔話伝説必携』四一号、学燈社、一九九一年、三八頁。また、島津久基氏は十七世紀後半の赤小本『めいよの翁』、十八世紀の赤本『枯木花さかせ親仁』、『花さき翁』おい楽の栄華』『花さきぢい』などを挙げ、「花咲翁」の形成時期を室町時代末から江戸時代初期とされている。島津久基『日本国民童話十二講』日本書院、一九四四年。

2 柳田國男「花咲翁」『定本柳田國男集』六、筑摩書房、一九八二年（初出一九三七年）。なお、佐竹昭広氏は「枯木に花」の譬えが致富や若返りの比喻として流布した室町時代末期以降に「雁取翁」が「花咲翁」へと転化していったのではないかと推察されている。佐竹昭広『民話の思想』平凡社、一九七三年。

3 伊藤清司『〈花咲翁〉の源流―日本と中国の説話比

較―』ジャパン・パブリッシャーズ、一九七八年。稲田浩二「殺された犬の軌跡―「花咲か翁」の国際的比較より―」『梅花児童文学』九号、二〇〇一年。

4 後述するように、文教本は、外題（題名）に「守景粉本昔話の絵」とあり、靖々光一（山本光一）による箱書にも「久隈守景翁か粉本」とあって、「粉本」として伝来している。確かに、住居の柱や庇の描写や杵などの小道具の描写（第十一図の手前に描かれている杵など）にやや荒い線が見られ、落款もなく、「粉本」との見方もできよう。しかし、文教本を基に制作されたと考えられる本画の存在が確認できない点、指示書がない点、全体的に淡彩ではあるが濃淡をつけた丁寧な彩色がなされている点などから、文教本が本画であると見ることができる。本稿では、早稲田本との関係論を論じるにあたり、指示書のある早稲田本は「粉本」（手本、手控え）、文教本は淡彩の「絵巻」と解釈する。

5 内ヶ崎有里子「江戸期昔話絵本「花咲翁」の諸本」『昔話―研究と資料―』二五号、一九九七年。

6 柳田國男氏は犬の由来を説く発端があるのを原形と捉えている。注2参照。

7 以下、昔話の採集地の地名は『日本昔話通観』刊行時点のものであり、そこに記されたままの地名を挙げ

ることとする。また本文および注での昔話の引用は、説明がない限り、全て『日本昔話通観』による。

8 「昔々ノ其ノ昔、或ル所ニ爺ト婆ト居ツタト。ソ一シテ子供ガナカッタサカライ、四郎ト言ウ犬ヲ自分ノ子ノヨーニ、大切ニシテ居ツタト」(富山県富山市)。

9 「とんとむかしあつたそなた。そしたらねえ、おじいさんやおばあさん、子供が無かつたげな。子供が無あて、おじいさのばあさんくらしておいでたらねえ、そしたらあんまりたいくつでいけんからねえ、い(犬)の子飼うたもんだ」(島根県仁多郡横田町)。また、福井県坂井郡三国町では、爺婆が町へ子どもをもらいに出かけると、松原に白い子犬がいて、「爺さん、爺さん、どこへ行く」と声をかける。「三国の町へ子供をもらいに」「爺さん、子供にしてもらえんか」「三国にいい子供がいなかったら子供にしよう」ということで、犬を子供のように育てるといふ話もある。

10 榎原悟『日本絵画の見方』「十二章 粉本のこと」角川書店、二〇〇四年。

11 江戸時代初期に描かれた絵画資料には、巾着や火打袋などの袋物を煙草入れとして使用し、煙管に巾着を結びつけて持ち歩く図が見られる。寛文五年(一六六五)刊の『京雀』には、合羽とともにたばこ入れと思

われる袋物を並べて売っている図が描かれているが、井原西鶴の『日本永代蔵』には、紙製のたばこ入れの記述が見られることから、十七世紀終わり頃には、紙製のたばこ入れが普及していたと考えられている。早稲田本の煙管と巾着は、早稲田本および早稲田本が参照したであろう絵巻が、十七世紀の終わりから十八世紀の風俗を描いていることを意味している。たばこ塩の博物館『根付と提げ物』同館、二〇一六年、十頁参照。

12 早稲田本第十図には唐箕が描かれている。唐箕は、『国史大辞典』に「元禄期(一六八八〜一七〇四)に中国から伝来した」とあるが、『日本大百科全書』には、「貞享元年(一六八四)の『会津農書』に「扇(とうみ)(唐箕)がみられ、寛政年間(一七八九〜一八〇一)には各地で使われるようになった」とある。貞享五年(一六八八)に刊行された『日本永代蔵』巻五十三に「方に工夫のふかき男にて、世の重宝を仕出しける。鉄の爪をならべ細摺といふ物を拵へ、土をくだくに、これ程人のたすけになる物はなし。この外、唐箕、千石通し、麦こく手業もとけしなかりしに」とあり、元禄期には、人々の暮らしの中で用いられる道具として徐々に普及し始めていたと思われる。民具研

究によれば、日本で唐箕の形態を示す文献の初出は、正徳二年（一七一二）『和漢三才図会』で、貞享年間（一六八四〜八八）にはその使用が確認され、享保年間（一七一六〜三六）に上層の農家の一部で使用されはじめ、十八世紀後半の天明・寛政期（一七八一〜一八〇一）になると、各地に相当普及するようになったという（『唐箕の伝来と普及』『日本民俗文化大系』十四号、一九八六年）。早稲田本に見られる唐箕は、『和漢三才図会』にみる唐箕とよく似た密閉型の唐箕であり、早稲田本および早稲田本が参照したであろう絵巻の成立は、十七世紀の終わりから十八世紀であると推察される。唐箕の挿絵は、注11で述べた煙管と巾着の挿絵と併せて注目できる。

13 大木卓『犬のフォークロア 神話・伝説・昔話の犬』誠文堂新光社、一九六九年、一七二頁。

14 『続神道大系論説編 烏伝神道（四）』神道大系編纂会、二〇〇三年、二四六頁。

15 酒井抱一展開催実行委員会編『酒井抱一と江戸琳派の全貌』求龍堂、二〇一一年。細見美術館編『細見美術館 琳派のきらめき』同館、二〇一五年。岡野智子監修『別冊太陽 江戸琳派の美』平凡社、二〇一六年。なお、明治十二年（一八七九）に制作された「おもし

ろくるま両くらへすころく」は山本光一によって描かれた絵すごろくで同一人物であると考えられる。東京都江戸東京博物館編『絵すごろく』同館、一九九八年。サントリー美術館編『逆境の絵師 久隅守景』同館、二〇一五年、九七頁。

17 守景の『四季耕作図屏風』は、ベルリン東洋美術館、石川県立美術館、京都国立博物館が所蔵するものなど七本が知られており、『耕作織蚕図屏風』は成相寺（京都）が所蔵する伝守景の屏風を含め二本が知られている。このほか、東京国立博物館蔵『耕織図屏風』など、守景が手掛けた風俗画は数多い。冷泉為人他『瑞穂の国・日本』淡交社、一九九六年。

18 吉田百太郎については、『古画備考』四二「狩野門人譜」の「吉田百太郎守親」項。榊原悟「第四章 贋作をめぐって」『日本絵画の見方』角川選書、二〇〇四年。ただ、文教本には落款がない。もし贋作であるならば、守景の落款があってもよいはずだが、それがないことは文教本が贋作者の手になるものではないことを意味しているとも考えられるのではないか。

19 このほか、立教大学図書館所蔵本（龍雲斎筆）、リンデン民族学博物館蔵本（無款）、小久保氏蔵本、兵庫県立歴史博物館蔵本、岡山県立美術館蔵本、二〇〇一

年七月に明治古典会に出品された伝本（田洲筆）があるという。このうち岡山県立美術館蔵本は、江戸時代に制作された狩野派のものであるという。平山郁夫編『秘蔵日本美術大観12 ヨーロッパ蒐蔵日本美術選』講談社、一九九四年、小峯和明「資料紹介 立教大学蔵『桃太郎絵巻』」「立教大学大学院日本文学論叢」一号、二〇〇一年、太田昌子「江戸の桃太郎イメージ」大隅和雄編『文化史の構想』吉川弘文館、二〇〇三年など参照。

（翻刻）

文科大学文学部日本語日本文学科所蔵『花咲翁絵巻』

【凡例】

- 一、原則として、改行および字体は原本のままとした。
- 二、破損などにより判読が難しい箇所は□で示し、現状から推察可能な文字については、□の横に（ ）で補った。
- 三、原本にある補入は「」で示した。
- 四、挿絵の挿入箇所は、その都度示した。

（本文）

□・□・□

事にはあれと

見れば画の精如□

詞書さへめてたさに□

むかし語も中々にな□

新し歳今物語にも□^{〔五〕}

枯木に花を

筆に花をさか□^{〔手カ〕}

らんとめておも□

よしいさゝか卷のはし□

し□

聞わたる

むかしかたり

を

めのまへに

見すけるは

筆の

すさひなり

けり

此花咲か祖父の□□□□古へより初児の寝物語にして誰々も耳馴たる事なれと何国いか成人と

云ふ事も知らず、只或時賤き民家^(にか)□年のころ
六十路余りの夫婦あり元より正直にして志もいと
やさしく情心の深けれとも子どもとはなく貧き
いとなみして暮しけるか農業のいとまに年頃
一疋の白犬を畜養^(ひてむ)□夫婦共深くいつくしみ朝夕
の喰物も我が子の如く養ひ居けるがある時翁此犬に
向ひて言ひけるは我是まで年久敷飼置けれとも
貧き身なればついに飽まで食を与へたる事もなし
何事能き幸ひのあらまほしく思ふ也汝生あらば
宝有る處を教へよと只戯れ言さとしければ
犬も打うなたれて聞に□□躰也しが或日農業にとて
鍬もて門を出ければいつもの如くすそにまとひて
したかひ行けるが

(絵1 六十路余りの正直者で心優しい夫婦は、貧し
いながらも一匹の白犬をかわいがり育てていた)

ふと道の辺りなる少しき草村のしけりたる所へ
行て頻りに鼻を鳴して其所を足にて掘りて
見えける故不審ながら心付き持たり鍬もて深く
掘て見ればあやしき一つの壺有けり□を見れば
皆小金にして数もしられぬほと也扱々此犬の教

にてかく宝を得る事日頃念ずる神や仏の
利益哉有かたしと天を拝し地を拝し歎ひ勇て
我家へ持侍り妻に此事を具に語れば歎ふ事
限りなかりけり猶もいと
此犬を大切に養ひけるが
是よりして人々の
為に救ひ施して
隱徳を積ける故
にや次第くゝに家畜
栄えけるとなり

(絵2 正直爺、犬の導きにより小金の入った壺を掘
りおこす)

此事何となく世の人聞伝へてうらやましく
思ひける中にも直隣のあるしは此事を聞て
頻にうらやましく思ひつゝ其犬を借てあや
かりなんと

(絵3 慳貪爺、小金の壺の話を書き、羨ましく思い、
犬を借りてあやかりたいと思う)

乞求めてある日仰の如く犬に云含めて伴ひ

出て先に飼主の教へしことく物有所を我にも

教よと言聞せけれとも此夫婦は大の欲心深き者

にて志も又邪なれば氣もしつ迄も荒く敷度々

喰物とても与へたる事□□なければ犬も又其心を

知りていやく曳れ出て行□□ふと道のかたはらに

少しき草村有所を足にて堀まねたく教へける故

所敢へす其所を堀て見れば宝は出すして

古き腕馬のわらじの類ひ又犬猫の白骨なんど

出ければ彼物余りにあきれはて、仰の犬を見れ□

とく逃げさりて見へはへらす

畜類いも生あればにや

尾の先を

欲と徳とに振りわけて

ゆく

(絵4 慳貪爺、古き腕、わらじの類、犬猫の白骨など堀り出す)

去るにても我等にはかゝる不浄のものはかり

有処を教へし事返すく憎きふるまい也と

いきとほりて仰の犬を尋出し即時にうち

殺し道のほとりへ埋めけりかくとも知らず

彼翁は手飼の犬の帰り来らざるを深く

あやしみ隣へ行て主□□ひければ

心から実に云ふ事を

聞へきや

何しろ犬に

咎は

有まじ

(絵5 慳貪爺、犬を見つけ出して打ち殺す)

情なき人に討れて

今こそは

犬死となむ

人や云ふめれ

先の如く怒りの、しりて其犬はあまり憎き

振舞したる畜生なれば打殺しかたはらへ

埋めたるなりと申なりと申にそ

(絵6 正直爺、慳貪爺の話に驚き悲しみ、犬が埋められた所に小松を植える)

翁は聞て打驚き

扱くびんなき事をしてけり(とま)□

仰の埋たる所へ尋行見れ(はか)□

如何にも土の小高き所あり

正しく是ならめりと立寄て涙を流し

扱もく情なき仕業かなと打悔みかたはら

なる小松一と本根こち曳ぬきて其所へ

印とて植置跡□にそ葬ひけるとかや

其後いまた程も(経)□さるに此松忽ち大木と

なり枝をたれ葉も繁りあひぬれは隣の

主又邪魔なりとて其枝を伐りて焚木とせしゆへ

(絵7 正直翁、仙人に頼んで大木となった松の木を切り倒す)

翁はまた奇怪なりと思ひ仙人を頼み(頼)□の

松を根元より切りたおし是にて臼を造り

なし翁夫婦其臼にて米麦「なんど」を舂上げて

見れば米も麦もばい増にて其中に小金を

生して見へければ翁夫婦大に歎ひてあたりの

者へも是を施しことかや

松も翁の徳によりてやかく一時に勢木

せしに只一旦の恨をはらさん為にむなしくなしたれば

千年の齢ひをたもつ

松な□を

只いちねんに

朽はたすとは

評に曰く

此臼にて折節戌の日く

などには米の団子を

舂て手向しとなん

此世には

いぬもの

なれと

団子

なら

さそ

ころ

くと

歎ひやせむ

(絵8 切り倒した松の木で臼をつくる)

隣の亭主是を遥に見てとにかくうらやましく

思ひけるが欲心者なれば又此臼を借受けて
右の如く米や麦を斗り込んで舂揚てはかり
見れば先に斗り入れし升の数より半は減し
たる上に宝も出されば大きに怒り忽ち
臼を打碎きてぞ捨たりける

(絵9 正直爺が臼で米や麦などを舂くと、倍増し、
その中から小金が出てくる)

餅につく程に宝□

まふければ

小金もちじやと

人や名付

けん

(絵10 慳貪爺が臼を借りて米や麦を舂くが、中身
は半減し、宝も出てこない)

かの爺は此様子を聞付て又隣へ行き
其躰を見て捨たる臼の欠ともひろひ
集め持帰り庭の木陰にて火をかけ
残らず焼捨たりけり

(絵11 慳貪爺は腹を立て、臼を打ち砕いて捨てて
しまう)

又其灰をかき集めて折ふし畑廻りの
梅や桜桃なんとの枯たる木へ此灰を振かけ
ければ時ならずして忽ち花咲実を
むすふ事奇とやいはん瑞とやいはん寔に
翁夫婦の志やさしく愛情深きものゆへ

(絵12 正直爺は、慳貪爺が臼を打ち砕いて捨てた
ことを知り、また隣へ行き、臼の欠片を広い集めて
持ち帰り、庭の木陰で焼く)

かゝる希代の有つると聞人毎に感じ
あへりとかや此事終に所の領主の耳へも
入れば或日領主も其業を致させ見んとて
供人あまた召連立て出来り
或人曰く灰に成たる松の
勢ひ斗りにても有まじ
宝の有所をかぎ知りたる
犬の鼻の能くきゝたる

所より花も咲きたるにや

(絵13) 正直爺が木陰でできた灰を集め、桜や桃などの枯木に振りかけると花が咲き実を結んだ)

此事を任せれば翁畏みて彼灰を持来り

仰の枯木へ打かけければ忽ち諸枝に花咲き

実もむすひけるを見給ひて限りなく感じ

歎ひ給ひ

(絵14) 正直爺の業が領主の耳に入り、領主らの前で枯木に灰をかけると忽ち花が咲き、実を結んだ)

枯木には花を咲せし

恩よりも

我家へ花を

さかす犬(こめ)□そ

或人曰く

此翁家業(はしめ)□□めて今より

造花屋に成ならば元手入らず

して嘸や繁昌すへしとや

当座の褒美也とて徒者に立ひ付て

金子あまた取らせ給へけるとや翁も三拝して押戴きはよりして指しも

富貴いやまし目出度市は栄へけり

(絵15) 正直爺は、領主からたくさんのお金を受け取り、栄えた)

扱此嘸の有よし□に画きて女童子の伽□

一興にもなすへしと年頃親き友に

志村何某の□(もか)とめに任せて永き日の徒ら

草に物せしとなれば詞書なくてはいかにも

解しかたからんとむかし乳母が懐にて寝耳に

聞伝へし□□□思ひ出て筆に任せて書入

たればひが事もおほかりなんさも又興を

そふるはしならめと孫子へのかたみ

かてらにいと、拙き筆を染て見る人

笑ひ草□□な□

(本学専任講師)

冒頭

予のいふは
 足違ふ画好種か
 洞書入りそき
 せし語も中
 新し今物
 枯木子花を
 多小も紙き
 しんらそ抄
 十いささのけ
 すつし
 いら

絵 1



絵 2



絵 4





絵
3



絵
6



絵
5



絵
7



絵
8



絵
9



絵
10



繪
11



繪
12



繪
13



絵
14



絵
15